書評・新刊紹介

林佳惠著『六朝江南道教の研究—陸修靜の靈寶經觀と古靈寶經』

冨田繪美

本書の出版からやや時間が経ってしまったが、とはいえ本書の試みは今後の靈寶經研究において重要であると思うので、改めてこの本について、そのおおよその内容と若干の疑問點について、私の分かる範圍においてではあるが、記しておきたい。

靈寶經について、初期の經典を作成した主體は誰であるのか、初期の經典が成立したのはいつ頃かという問題は、長い間諸説紛々としてきた點である。

つとに一九四九年、陳國符が『道藏源流考』において言及して以降、後漢末の道士葛玄、『抱朴子』の著者である葛洪、そして葛巢甫へとつらなる「葛氏道」グループが靈寶經を作成したとするのが通説であった（陳國符『道藏源流考』、中華書局、二〇一四年。初版は上海中華書局、一九四九年）。しかし、大淵忍爾は敦煌寫本の中から梁の道士宋文明による『通門論』と擬定できるものを見つけ、その中に陸修靜による「靈寶經目錄」（以下「目錄」）の内容が殘されていることを明らかにした（"On ku Ling -Pao-Ching," *the Acta Asiatica 27*, The Toho Gakkai,

Tokyo, 1974)。『雲笈七籤』に陸修靜の「靈寶經目序」（「目序」）が收錄されており、「目錄」の存在はもともと知られていたものの、「目錄」そのものは殘存していなかったので、大淵の發見は、陸修靜のころに存在していた早期の靈寶經を明らかにするための重要な絲口となった。

この陸修靜の「目錄」の中で特に問題とされたのは、そこに著錄される靈寶經が、「元始舊經紫微金格目三十六卷」（「元始舊經」）と「葛仙公所受教戒訣要及說行業新經」（「仙公新經」）の二つのカテゴリーに分類されていたことである。多くの研究者が、二グループの靈寶經の作成者と成立年代を明らかにしようとしてきた。たとえば小林正美は「目錄」著錄經典を、經典の內容から新たに二分類し、葛氏道によって作られた「元始系」靈寶經と、天師道一派が作成した「仙公系」靈寶經とが存在するとした（小林正美『六朝道教史研究』、創文社、一九九〇年）。また大淵は「目錄」において、各經典に「已出」か「未出」と記されていることに着目し、「元始舊經」中の「已出」經典は、葛巢甫が編纂したとされる「舊目」に基づいて選定した經典、「元始舊經」の「未出」經典及び「仙公新經」は葛巢甫の後學が作成したものであるとした（大淵忍爾『道教とその經典』、創文社、一九九七年）。王承文は、「仙公新經」は「元始舊經」の補助及び注釋を目的としており、二系統の靈寶經は同じ作成者グループによって作られたのだとする（王承文『敦煌古靈寶經與晉唐道教』、中華書局、二〇一七年）。一方劉屹は「仙公新經」は「元始舊經」よりも成立時期が早いとする（劉屹『六朝道教古靈寶經的歷史學研究』、上海古籍出版社、二〇一八年）。このように大淵が陸修靜の「目錄」を發見して以來、實に半世紀近くの間、「元始舊經」と「仙公新經」二系統の靈寶經の作成者と成立年代について議論されてきたのであるが、一向に統一見解を得るに到っていない。

本書の著者は、これらの研究に共通しているのは、彼らが二系統の靈寶經の作者グループとして、「道流」なるグループの存在を前提としていることであると述べて

いる。

本書はこの半世紀間の靈寶經研究における本質的な問題點を指摘する。「古靈寶經に二系統あること自體が、議論の前提としてなり得るものであるのか」と。本書の最大の特徴は、靈寶經について、經そのものの成立過程と、陸修靜による整理體系化の結果とを完全に分けて考えていることにある。

たしかに、從來の議論においては、陸修靜の「目錄」に書かれている通り、早期の靈寶經には「元始舊經」と「仙公新經」の二系統が存在するという理解が、議論の根底に存在していた。本書の問題意識は、その前提自體に疑義を投げかけ、議論の枠組みに對する根本的見直しを迫るものである。この問いかけにより、私たちはこれまで、早期の靈寶經の實際のあり方そのものと、「目錄」編纂者である陸修靜の靈寶經に對する捉え方とを、明確に分別せずに論じてきたことに氣づかされる。いわば私たちは、陸修靜の靈寶經觀というフィルターをかけたままで、早期の靈寶經の實際のあり方そのものを見ようと四苦八苦していたのだ。

この問題について考えるために、本書は三篇に分けられた全七章から構成されている。第一篇（第一～三章）は、陸修靜の「目錄」の記述にもとづき、陸修靜はどのように「元始舊經」と「仙公新經」とを分類したのかという分類基準の推定と、その背景にある彼の靈寶經觀を明らかにするものである。例えば第一章では、小林正美が早期の靈寶經を「元始系」靈寶經と「仙公系」靈寶經とに分類したときに、分類基準に合致しない例外が存在しているとしていることを述べる。そして、元始天尊が說いた經典である「元始舊經」と、葛仙公が傳授された經典である「仙公新經」という分類基準によって例外無く分類することが可能であることを明らかにしている。

第二篇（第四～六章）は、「目錄」に著錄された諸靈寶經の分析により、陸修靜が「目錄」で示しているような「元始舊經」と「仙公新經」という二系統のカテゴリー概念が、本來は靈寶經の中に存在していたのかどうかを檢證している。本書によれば、現行本を見る限りにおい

て、「目錄」著錄靈寶經の中で「舊」の語が使われるとき、そこには「元始舊經」のような經典カテゴリーとしての意味は無く、その經が天地開闢以前から存在していたという、「天書」としての正統性を示す場合が多いのだという。また、靈寶經の中に見える「元始天尊十部妙經三十六卷」の語は、從來は「元始舊經」と同一の概念であると見なされてきた。しかし本書においては、靈寶經の中にある「十部妙經」の觀念が陸修靜の考える「十部妙經」とは異なっていることを指摘している。そしてこれらの檢討から、「元始舊經」というカテゴリー概念は、元始天尊の說く「元始舊經」の「天書」としての正統性を明確に示すことを企圖して、陸修靜が靈寶經中の諸要素を擴大解釋して新たに作り上げたものである可能性を示唆している。

第三篇（第七、八章）は、『雲笈七籤』に收錄されている「目序」の記述などから、陸修靜の靈寶經觀を明らかにしている。これまでの研究においては、天師道關連のことがらである『道德五千文』や張道陵の尊重、天師道の神々や儀禮などに對する言及は、「仙公新經」の特徵であると考えられてきた。しかし本書は、こうした天師道關連のことがらは「新經」と「舊經」の枠組みを超えて見られること、『道德五千文』に對する信奉は天師道だけに限られていたものではないこと、天師道關連のことがらが靈寶經獨自の解釋によって經典中に取り込まれていることを指摘している。そして、「仙公新經」の作成者は天師道ではなく、靈寶經獨自の立場から天師道關連の諸事を改編しようとした經典作成者が存在していたのだと述べている。また、「目序」の記述から、陸修靜が考えている靈寶經の「歷史」の基本的構造を明らかにしている。

これらの考察によって、第一に、「元始舊經」と「仙公新經」という二系統のカテゴリー概念に對する見直しの必要性があることが明らかとなった。本書によれば、陸修靜の「目錄」に存在する「元始舊經」と「仙公新經」という二系統のカテゴリー概念は陸修靜以前には靈寶經中に存在しておらず、靈寶經の作成者はそのような

認識の下で經典を作成していたとも認められない。陸修靜の靈寶經觀においては、元始天尊が說いたとされる靈寶經が靈寶經體系の中心にあり、二系統のカテゴリーは、彼の靈寶經觀に基づいて現實に存在する靈寶經を整理し體系化する際に創出された可能性が高いのだという。

本書で明らかになった第二の點は、陸修靜の靈寶經觀の基本構造である。陸修靜は元始天尊所說の靈寶經を靈寶經體系の中心に位置づけ、劉宋建國の時に瑞祥として出現した「天書」であると解釋する。一方、當時存在していたその他の靈寶經を、劉宋以前に「天書」として存在し、そのまま傳世してきた經典であるとする。この、劉宋建國時の「天書」と當時の傳世文獻とを、陸修靜は「元始舊經」と「仙公新經」との二系統に整理したのではないかと本書では述べている。

本書の研究は、これまで長いあいだ早期靈寶經研究において前提とされてきた「道流」の設定から離れ、また今世紀に入ってから、謝世維、呂鵬志、張超然らが提唱してきた靈寶經の「天書」觀を踏まえたうえで、これまでの靈寶經研究のあり方に根本的な問い直しを迫り、靈寶經と初期道教の形成を考える上で大いに示唆に富むものである。しかし、讀者にとって物足りなさを感じさせる點は、本書のいうように「元始舊經」と「仙公新經」という二系統のカテゴリー概念が陸修靜の創案であるならば、陸修靜が介在する以前の靈寶經の實際の狀況は一體どのようなものであったのか、この點について言及が無いことである。恐らくこの點は、著者の今後の研究で解明されていくだろう。

また、陸修靜が靈寶經を二系統に分類した動機、および本書が明らかにしたような靈寶經觀を持つに到った背景を、當時の道教をめぐる社會的狀況からさらに說明してほしいと感じた。本書の研究によれば、陸修靜は劉宋建國に際して「天書」として出現した元始天尊所說靈寶經を靈寶經體系の中心に位置づけ、それを明示するために「元始舊經」と「仙公新經」という二つのカテゴリー概念を作り出したのだという。つまり、彼が行なった靈寶經の整理と體系化は、單に當時の靈寶經が實際にあっ

た狀況を記錄するといったものではなく、劉宋建國に際して「天書」として經の正統性を示すという、陸修靜自身の恣意が大いに反映されたものだといえる。こうした陸修靜の恣意を、劉宋建國との關連からも說明してほしいところである。

さらに、陸修靜による靈寶經分類と彼の靈寶經觀の、道教史における位置づけについても、もっと踏み込んでほしかった。本書は陸修靜の「目錄」における「元始舊經」と「仙公新經」という二つのカテゴリー概念が、陸修靜による獨創であるとする。さらに本書第八章では、こうしたカテゴリー概念が、「靈寶中盟經目」をはじめとする後世の靈寶經目錄には繼承されていないことが明らかとなった。本書のいうように、劉宋において陸修靜が創出した靈寶經のカテゴリー概念が梁の武帝期に早くもうち捨てられているのであれば、陸修靜の「目錄」編纂は、道教史においてどのような意味を持つのだろうか。また、このように梁で早速無視された陸修靜の目錄が、同じく梁代の宋文明の『通門論』に收錄された理由はなんなのか。『通門論』に收錄されなければ、敦煌寫本から發見されて陸修靜の「目錄」が私たちの目に入ることは永久に適わなかった可能性もあるので、興味がある問題である。

本書の研究により、私たちはこれまで無批判に前提としてきた陸修靜「目錄」によるフィルターの存在に氣づかされ、このフィルターを取り拂って、早期の靈寶經の實際の狀況そのものを明らかにできる可能性を得たといっても過言ではない。本書の研究を踏まえ、靈寶經研究の新たな展開に期待するところである。

（A5判、三〇〇頁、二〇一九年三月、早稻田大學出版部、早稻田大學エウプラクシス叢書016、四〇〇〇圓）